



Title	日本語従属節のテンス構造
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85028
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

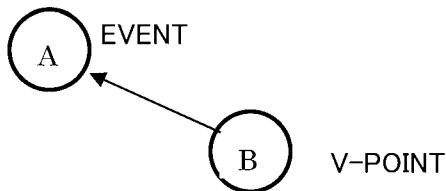
日本語従属節のテンス構造

井元秀剛

1. はじめに

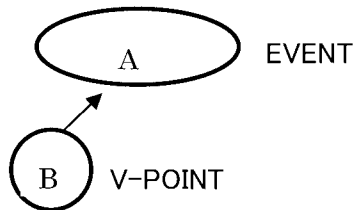
メンタルスペース理論による談話構成原理は、時制形式の流れについて、出現位置の文法的性質とは無関係に、ある一定の法則に従って使用されているという大胆な仮説である。筆者は Cutrer (1994)を嚆矢とするメンタルスペースの時制理論に依拠し、BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT という 4 つの基本スペースの組み合わせであらゆる時制形式の価値を表現できるという立場をとっている。日本語の時制形式であるル形とタ形について、井元 (2010)では次のように規定した¹。

(1) タ形



(EVENT を時間的に前とするような位置に V-POINT が設定される)

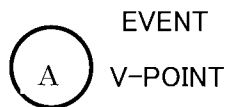
(2) ル形



(EVENT を時間的に同じか後とするような位置に V-POINT が設定される)

時間的に同じ場合、EVENT と V-POINT は同じスペースにあってもよい。従ってル形は

(3)



と書いてもよいことになる。

(3)はまた談話における初期値の構成であり、日本語の場合、ここからル形もしくはタ形の

¹ 終止形と連体形は区別せず、形容詞の終止形や連体形もル形に含めるし、「読んだ」のような撥音便もタ形に含める。また「そこに行くと、彼にあった」のようなト条件文の「行く」もル形であるし、「そこに行ったら、彼にあった」のようなタラ条件文における「行った」もタ形である。

使用によって V-POINT が移動し、言い切りの形で最後に移った V-POINT が BASE となる。FOCUS は基本的に EVENT の位置にあるが、タ形が完了の意味を帯びるとき、V-POINT の位置におかれることもある。図は上下の関係が作られていくスペースの順序を反映し、新しく作られるスペースは下にかかれる。また左右は時間関係を表し、左側が過去、右側が未来である。矢印は視点の向きを表す。

日本語のテンスマーカはル形とタ形しかなく²、これらは EVENT と V-POINT との関係のみによって規定されるものである。これらが使用され、(1)から(3)のどれかの形が構成された後、次の述定における EVENT の位置は次の 3 つのうちのどれかに限られる。

- (4) a. V-POINT の位置に移動する
- b. 同じ位置にとどまる
- c. 全く新しいスペースに移動する

本稿の目的は日本語の従属節内で用いられる時制は(4a)となるのが普通であり、(4bc)となるためには特殊な条件が必要であることを示すことである。なお、(4)は主節と従属節の関係のみならず、連続した時制のすべてにあてはまるものであるが、従来の議論は、従属節の後に主節が来る関係の中で、従属節の時制が問題にされてきた。本稿でも従属節の時制を中心に議論することになるが、その場合、(4a)は主節時基準、(4c)は発話時基準ということになるが、(4b)はどちらの場合もあり得る。従属節 P と主節 Q が同一スペースにある場合、P は相対テンスを用いることも絶対テンスを用いることも可能である。

- (5) a. 昨日テレビを観ているときに、隣室から異様な音が聞こえた。
- b. 昨日テレビを観ていたときに、隣室から異様な音が聞こえた。

(5)は同じ事態を(5a)では相対テンスを、(5b)では絶対テンスを用いて述べている。(5a)の場合、P の段階ではル形が(3)の段階でとどまっておき、Q の段階で V-POINT が移動して(1)の形を作り、その V-POINT が BASE と認定されるという形である。この場合も Q は P の V-POINT の位置に EVENT が来ており、相対テンスとなることから(4a)の特殊ケースであるとみなすべきだと思われるが、例外的な動きにみえるケースもあるため本稿では(4b)の中で論じることにする。

2. EVENT が V-POINT の位置に移動する場合

(4a)のケースであるが、このパターンが最も制約が少ない。典型的には「～した／～する時」のような時況節やタラ条件文のふるまいに見られる。

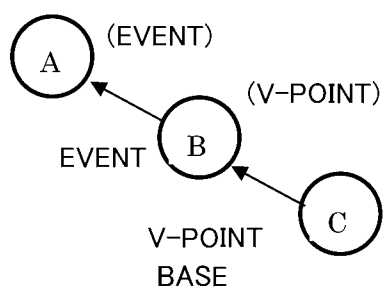
- (6) a. この鞆は日本に行ったとき、母が買ってくれました。
- b. この鞆は日本に行くとき、母が買ってくれました。
- c. 鞆は日本に行ったとき、母が買ってくれます。
- d. 鞆は日本に行くとき、母が買ってくれます。

² 本稿ではル形とタ形を一律にテンスマーカとみなす。従属節内で使用された場合など、相対テンスではなく、アスペクトを表しているにとることも可能であるが、筆者はアスペクトはテンス素性に FOCUS が関与することで生じる二次的な属性であると考えている。

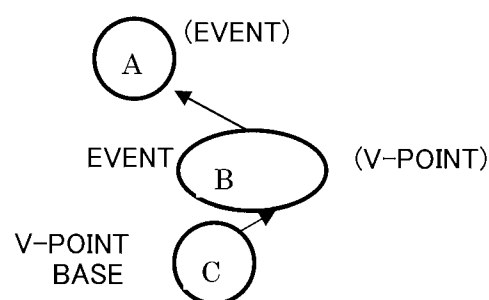
(6)のようにスルとシタのすべての組み合わせをあげてみると明らかであるが、従属節の「行く」と主節の「買う」の関係は、タ形を使った(6ac)では常に「行く」は「買う」より前(以下この関係を「行く<買う」のように表現する)であるし、ル形を使った(6bd)では常に「行く」は「買う」より後(この関係を以下「行く>買う」のように表現する)である。これらはすべて主節時基準の相対テンスであると筆者は考えているが、(6ad)は絶対テストのつもりで発したとしても同じ形になる。従って絶対テンスを用いる英語話者が(6a)を(6b)のつもりで用いたり、(6d)を(6c)のつもりで用いるという誤用は出現しやすい。実際(6a)のような発話を聞いて、日本でその鞆を買ったのかと思い、そう尋ねたところ、行く前に買ったのだと返答され、それなら(6b)のように言いなさいと訂正してあげたところ、過去のことなのになぜと問われて説明に窮したという話を耳にしたことがある。これらの関係をスペースを使って図示すると以下ようになる。以下従属節のイベントを P、主節のイベントを Q とする。

(7) P シタ Q (P<Q)

a. P シタ Q シタ (P<Q<発話時)

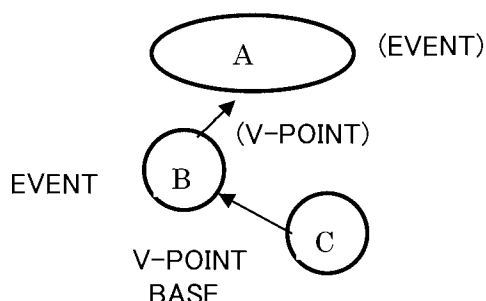


b. P シタ Q スル (P<Q ≥発話時)

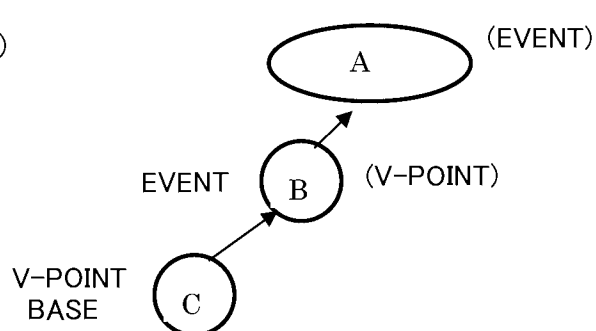


(8) P スル Q (P≥Q)

a. P スル Q シタ (P≥Q<発話時)



b. P スル Q スル (P≥Q ≥発話時)



(6ab)は(7ab)に、(6cd)は(8ab)に対応する。前件における P の段階では(7)は(1)、(8)は(2)が適用され、括弧付きで示したように A が EVENT で B が V-POINT となる。(4a)の動きは

この V-POINT の位置に EVENT が移動する、というもので、ここに主節の EVENT がおかれ、かつこ無しの構成ができあがる。C が最後に移った V-POINT の位置であるが、主節であり、ここで言い切りになるので BASE ということになる。FOCUS は省略したが、いずれの述定の場合も EVENT と重なるとみてよいであろう。このように前件の V-POINT は主節の EVENT の位置にあるので、主節時基準ということになるのである。

タラ条件文の場合は既定条件であろうと、仮定条件であろうと、前件 P がタ形で導入されているので、(6)の形しかあり得ない。

(9) a. この本を読んだら時制の仕組みが分かりました。

b. この本を読んだら時制の仕組みが分かります。

(9a)は(7a)に、(9b)は(7b)に対応するが、意味的に条件の事態は帰結の事態に先行するから、(7)の形以外はあり得ないのである。「P スル前 Q」「P シタ後 Q」の形も時間的前後関係を述べたものであり、その意味がそれぞれ $P > Q$ と $P < Q$ であるから、(7)と(8)の形に固定されている。

これらの固定した形に対し、「P スル／シタ時 Q」は例外的なふるまいをすることがある。

(10) 先月、ロシアに行った時は、シベリア鉄道を使った。 (工藤 2014: 227)
主節の「シベリア鉄道を使う」行為は従属節の「ロシアに行く」行為が完成する前だから、(8a)の形になるはずである、実際(8a)の形をとって

(11) 先月、ロシアへ行く時は、シベリア鉄道を使った。 (工藤 2014: 227)

としても同じ内容を表現できる。なぜ(10)の形が成立するのか、については後ほど述べる。

時間を表す副詞節や条件文の場合は P と Q の時間関係がかかわるので、その間に直接的な関係が成立するのは明らかであるが、単に指示対象を指定するために用いられる関係節の場合でも、(4a)の主節時基準となるのが普通である。

(12) a. 答案を書いた人は 3 号室に移った。

b. 答案を書く人は 3 号室に移った。

c. 答案を書いた人は 3 号室に移ってください。

d. 答案を書く人は 3 号室に移ってください。

(12ac)は既に書き終わった人であるから(7)であり、(12bd)はこれから書く人なので(8)である。答案を書いたのは既に過去のことなのだからと絶対テンスを用いて(12b)の内容を(12a)のように書くことは許されない。ただしこのような関係節の場合も例外的なふるまいをすることがある。

(13) 福井交通の運転手が[越前海岸で自殺した女性]をそこまで車に乗せて行った(らしい)。 (三原 1992:16)

(13)は従属節 P の「自殺した」は主節 Q の「車に乗せて行った」より明らかに後の出来事である。従って主節時基準なら(8a)のようになるはずであるが、タ形を使うことも可能である。このことから三原 (1992)は関係節と主節の時制に関して、「主節・関係節が同一形式を有する時、関係節時制形式は発話時を基準として成立する」という主張をする。確かに(12a)

のような場合も絶対テンスだと主張できないわけではないし、(13)のようなケースも捕捉できるからこの主張は妥当に見える。そもそも、主節がタ形の場合、従属節が相対テンスをとった場合も同じタ形になり、主節がル形の場合、従属節が相対テンスの場合でも同じル形になる。しかしながら(12)では主節の時制にかかわらず、「書いた人」と「書く人」の間に明らかな意味の違いがあり、主節時との関係が同じように成立するので、(12ad)も相対テンスだとみなすのが妥当であろう。もし三原の主張通りなら、発話時に答案を書き終わっていた場合、(12b)の意味で(12a)を用いることができるし、発話時にまだ答案を書いていなければ、(12c)の意味で(12d)を用いてもよいことになってしまう。(13)についても三原自身が「らしい」を補っているように「乗せていった」だけではなんとなく座りが悪い。相対テンスを使って

- (14) 福井交通の運転手が[越前海岸で自殺することになる女性]をそこまで車に乗せて行った(らしい)。

とすると「らしい」がなくても問題ないだろう。このことから関係節の場合も主節時基準の相対テンスが原則であり、(13)のような形は例外的なものであるとみなすべきであると思われる。なぜ(13)が成立するのか、については後ほど考えてみたい。

未来の事柄であるが、それを完了した状態で想定するような場合、一見すると(7)にあてはまらないように思える文も存在する。

- (15) 花子のために無理して絹のドレスを買った。彼女がこれを着た姿を想像すると胸が熱くなった。

(15)の「着た」は結果状態のアスペクトを表しており、現実の時間とは無関係に、想像の世界では「着る」という形で EVENT である A を完了した状態で見ている V-POINT の B に「想像する」の EVENT が置かれる構造である。A は想像の中の産物であって、対応する現実世界が B よりあとであっても、想像の世界の中では過去であっても構わないのである。従って(7b)が当てはまる。仮に(15)の「着た」に副詞が加わり「これを明日着た姿」としても同じである。同様のことは以下の各文にも当てはまる。

- (16) [彼が政権から去った] あとが心配だ。 橋本 (1997:49)
(17) 犯人はアリバイ工作のため、[2月19日は金沢に行ったと] 隣人に思い込ませようとした。 三原 (1992:31)
(18) 先ほどの議論では[明日の戦闘で敵がノルマンディに上陸したと] あらかじめ想定してみた。しかし明日本当に上陸してくるかどうかは分からない。

橋本 (1996:32)

このうち(17)は主節の「思い込ませようとした」は2月19日以前の読みを問題にしている。また(18)は二文目を付け加えることによって「上陸した」が発話時基準としても当てはまらないことを示している。ただ、いずれの場合も[]内のできごとは現実スペースではなく、主節時に思い描いているメンタルスペース内部のできごとである。(18)で「明日」という限定と「上陸した」のタ形が共起しているのもこれが仮定スペースだからに他ならない。この

ような仮定スペースの中では主節時に P が既に完了済みの状態として存在していると考えべきであり、P を完了済みのものと見ている V-POINT に主節の EVENT が置かれていると言えるのである。P が対応する現実の P' は $P' > Q$ ではあってもメンタルスペース内の P は常に $P < Q$ であって(7)が成立すると筆者は考えている。

(19) あの男の「日本に来る」まえの経歴を調べてみた。 橋本 (1997:51)

これも類例として処理できる。「日本に来る」は想定スペース内の出来事ではないが、問題になっているのは経歴である。P を未来として見る V-POINT に経歴として存在している対象を「調べてみた」のであり、P の V-POINT と Q の EVENT は重なるのである。

3. EVENT が同じスペースにとどまる場合

(4b)のケースであるが、従属節と主節が同一スペースと解釈できるときにはこれが可能である。EVENT に限らず、基本スペースの位置が変わらないというのは、談話構成原理のもっとも基本的なありようであり、文をまたがった場合でも絶対テンスを使った表現として可能な構成である。

(20) 昨日大学で言語学の授業を受けた。とても面白かった。

第 1 文の大学で授業を受けたスペースと、第 2 文のそれを面白いと判断したスペースは同じと解釈するのが自然である。同一のスペースで生じた事態をともに BASE を視点として描写しているのである。しかしながら従属節と主節という形で述定が連続する場合、述定される事態の間で何らかの関係が生じるのが普通で、V-POINT の位置に EVENT が移動して、前後関係を明示することになるのが普通である。そうではなく、あえて EVENT が同じ位置にとどまり、しかも絶対テンスで表現されるためには、ル形やタ形が備えるアスペクト的価値を捨象し、あえて同一スペースであると解釈できなくてはならないという条件が必要になるのである。相対テンスで表現してもよさそうなのに、そうっていないケースの大半は、全体としてイベントを見た場合に同一スペースの出来事とみなせるというこのケースのものである。(10)の例が典型的で、ロシアへ行くという行為を全体としてひとまとまりのものと見なしており、「行く」行為と「シベリア鉄道を使う」行為の前後関係を問題にしていない。

(21) 先月、ロシアに行った時は、往復ともシベリア鉄道を使いました。

工藤 (2014:227)

(21)では復路も含めて「ロシアへ行った」と同時性で把握されているので、この場合は絶対テンスを使用したタ形しか用いることはできない。ル形があてはまるのは往路だけであって復路は当てはまらないからである。

時間関係を表す副詞節のうち、「P スル前 Q」と「P シタ後 Q」は前述したように P と Q の前後関係を表現するためのものであり、形式的に同一スペース解釈はできず、相対テンスにならざるを得ないが、「P{スル/シタ}時 Q」の場合、同時性を表すのが本義であるから(10)や(21)のような絶対テンスの使用が常に可能であるはずなのだが、実際には(6)のように相対テンスの方が普通である。手紙をコンビニに行く途中で投函したという状況では

(22) a. 手紙は先ほどコンビニに行くとき、出しておきました。

b. 手紙は先ほどコンビニに行ったとき、出しておきました。

のどちらも可能だろう。わざわざ動作の完了前ということを明示しなくても、全体的同時性としての把握が可能だからである。(6)の場合も、20年前のできごととして

(23) このスーツケースは20年前、フランスに行ったときに買ったものです。

とすると、行く前に買った場合でも可能かもしれない。フランス旅行のために買ったのであって、全体的同時性と把握することが可能になるからである。

テイル形や形容詞述語もしくはイル・アルのように状態を表す場合、ル形タ形ともにアスペクト的差異が捨象されるので、同一スペース解釈が容易にできる。そのため(5)のようにどちらを用いても差が無い文ができる。

(24) a. 私も若いときはよく山に登りました。

b. 私も若かったときはよく山に登りました。

(25) a. その店はフランスにいるとき、よく行っていました。

b. その店はフランスにいたとき、よく行っていました。

過去における同一スペース解釈は(24)(25)のように、相対テンスを用いた「ル形・タ形」の形も絶対テンスを用いた「タ形・タ形」の形も原則として可能であるが、Pがル形の形しか許容されないものもある。ト条件文がそうであり、「P スルト Q」の型に固定され、「*P シタト Q」とは言えない。ト条件文はタラ条件文でも同じ内容を表現できることが多い。

(26) a. 教室に行くと太郎が来ていた。

b. 教室に行ったら太郎が来ていた。

同じ事態であるが、(26a)はPQを同じスペースとして、(26b)は異なったスペースとして捉えている。同一スペース解釈が難しい内容であれば、ト条件文は用いることができない³。

(27) *家で寝ていると、伊豆で地震が起こった。 蓮沼 (1993:77)

(27)は「家で寝ていたら」というタラ条件文に変えると問題ないだろう。

「～スル型」「～スル事態」「～スル計画」「～スル予定」のように、しばしば「～スル(トイウ)N」のようなトイウを挟むことが可能な名詞句を構成する場合もル形のみである。

(28) 左足から踏み込んで左前まわしを取る型を確立した。 丹羽 (2013:267)

(29) アメリカに留学する計画が実現した。 丹羽 (1997:59)

これらは完成相のアスペクトとして行為の全体をNとして把握しているわけで、そのように把握することの可能な位置で主節のイベントが記録される恒常スペースからの転送で、同一スペースのル形としての把握であると考えることができる。丹羽 (1997)は(29)について、これらの基準時を発話時と考えても主節時と考えてもつじつまがあわず、「計画」が思い描かれた時点を経験時としてそれ以降を表しているとして述べているが、計画は計画を実現しているときも計画として把握される状態にあるのであるから同一スペースとみなすべきであ

³ (27)は蓮沼の判定だが、人によっては許容することもあるかもしれない。スペースの取り方には可変性があり、何らかの形で同一スペースとの解釈ができればよいのである。

る。「リンゴを食べた」という場合、食べ終わった瞬間にリンゴは消失するが、「食べる」の EVENT にリンゴが存在していないということはできないのである。

ル形がステージレベルで単一のイベントを表すのではなく、恒常的な状態として表現される場合も完成相アスペクトとしてのル形による同一スペース解釈が可能である。

(30) 母の作るおはぎはいつもおいしかった。 (三原 (1992:23))

三原も指摘するように、この「作る」は習慣的動作を表しておりいわば汎時間的指示であり、「おいしい」という状況と同一スペースの中で生じているという解釈が可能なのである。ただし、この場合完了アスペクトとしての把握も可能で、

(31) 母の作ったおはぎはいつもおいしかった。

と表現することも可能である。これは同一スペースによる絶対テンスの使用というより、相対テンスである(7a)の形であると筆者はみなしたい。

予定を表す場合、「～スル予定」と明示された場合は前述したようにル形しか可能ではないが、動詞句のみで表現された場合、ル形もタ形も可能である。ただし、ル形はそのような予定があるという状態を表すので、予定の内容の前後とは無関係に同時とみなすことができる。

(32) 今日は会議があるから{早く帰る／帰りが遅くなる}

(32)は会議の時間と帰宅する予定の時間との前後関係は問題にならない。いつも6時に帰る発話者が5時にオンラインでの会議があるので、自宅から出席するために4時に帰宅する(「早く帰る」)を意図する場合でも、会議に出たあとで7時に帰宅する(「帰りが遅くなる」)を意図する場合でも「会議がある」のル形を使用できる。これは予定の言明であり、予定は(32)のように「会議がある」「約束がある」のように状態動詞「ある」を用いて表現することが多いように、基本的に状態を表現するものである。もはや予定として機能しなくなった場合、「明日は6時から会議があったのだが、行かない」のように未来のことがらでも過去形で表現できるようにその予定を保持している状態と理解するべきものである。予定の内容が動作動詞で表現されている場合もこれに準じ、(32)の「会議がある」を「テレビを観る」に変えても同じだろう。ただし動作動詞の場合予定と理解されるのはル形のみであって、「会議があったのだが」と未来の予定を否定できても、「会議に出たのだが」は条件文以外の解釈ではキャンセルした予定の意味で用いることはできない。(32)の主節を過去にすると

(33) a. その日は会議があるから早く帰った。

b. その日は会議があったから早く帰った。

c. ??その日は会議があるから帰りが遅くなった。

d. その日は会議があったから帰りが遅くなった。

(33ab)では会議は予定であり、そのような予定があるという状態と「早く帰った」という動作が同一スペースにあり、相対テンスのル形も絶対テンスのタ形も使用できる。(33b)で「タ形・タ形」の組み合わせでありながら(7a)にならないのは、同一スペースであるからである。

「会議に出た」のように動作動詞のタ形だと予定にならないので、(33b)の意味では用いることができない。(33cd)の状況では会議は予定ではなく、過去の事実になっているので、(33c)では表現できず、(33d)のように(7a)の形にならなくてはならない。

次の例も予定の一種である。

(34) 次に来るバスに乗ってください。 丹羽 (2013: 264)

この「来る」は予定であるが、現在の状態を表しており、この時点ですでに存在しているバスを指定する機能をもっている。予定の EVENT は予定そのものの実現スペースではなく予定として存在しているスペースであるということの具体的な事例にもなっている。主節はそのバスに乗りなさいという予定の命令であり、「来る」も「乗る」も同一スペースであるとみなせるのである。

4. EVENT が全く新しいスペースに移動する場合

P と Q が独立している場合、全く新しいスペースに Q の EVENT が設定されることがある。「ここは今はさびれているが、10 年前はとても賑わっていた」のように等位接続の文や独立した 2 文の間では珍しくないが、従位接続の場合は例外的である。P が独立しているということで P の V-POINT が BASE でなくてはならないが、同時以外の関係で結ばれる時、そこに前後の関係が必然的に問題とする構造になりがちだからである。例外が生じるのは関係節の場合である。(13)が典型的な例であるが、このような例を見つけることはさして難しくはない。

(35) 10 年前、去年庶務課にいた田中と初めて知り合ったんだ。

(35)は 10 年前スペースと去年スペースが作られており、従属節 P の EVENT は去年スペース、主節 Q の EVENT は 10 年前スペースである。この 2 つのスペースを同一とみなすことはまず無理だろう。タ形・タ形の組み合わせだから、本来(7a)のように $P < Q$ となるはずなのに、 $P > Q$ となっている。

これは指示対象を指定するための名詞句の指示のあり方と関わっている。

(36) 2015 年、首相は野党と密室の合意にこぎつけた。

(36)の首相はデフォルトでは 2015 年当時の阿部首相を指すと思われるが、発話時の管首相を指すことも可能である。当時は官房長官であって首相ではなかったが、アクセス原理によって親スペースである現在の属性によって指定された対象とアイデンティティーコネクターで結ばれた FOCUS スペースの要素が指定対象となっているのである。これはメンタルスペース理論ではよく知られた現象である。(35)は「去年」という BASE を基準にした副詞の使用があるからこのアクセス原理による解釈が優勢になるが、この副詞がないと

(37) a. 10 年前、庶務課にいた田中と初めて知り合ったんだ。

b. 10 年前、庶務課にいる田中と初めて知り合ったんだ。

(37)はどちらも同一スペース解釈で、10 年前スペースで当時田中が庶務課にいたという読みが普通だろう。(37a)が相対テンス、(37b)が絶対テンスの使用だが、意味は同じである。これ以外に、(37a)はそれ以前に庶務課にいたという相対テンス解釈や、(35)のような現在以

前 10 年前以降というアクセス原理解釈も可能であるし、(37b)も現在庶務課にいるというアクセス原理解釈も可能である。しかし、どちらの場合もアクセス原理解釈は親スペースの属性が認知的に突出した最もアクセスしやすい情報であるという条件が必要であり、例外的なふるまいであるといつてよいと思う。(13)も「越前海岸で自殺した」という属性がその女性を指示するのに最もアクセスしやすい情報であったために使われたのである。

5. 結論

以上の考察から、日本語の従属節のテンスは主節時を基準とした相対テンスを用いるのがもっとも制約が少なく、(7)(8)が基本の構造であることがわかる。これは **P** と **Q** がル形とタ形の組み合わせで提示されたときに括弧で示した時間関係を示すと同時に、括弧でしめされた時間関係を意味する場合、対応した形式になるという双方向の図式であることを意味する。ただし、**P** と **Q** が同一スペースのイベントであると認識することが可能な場合、**P** が絶対テンスをとることも可能で、一見すると(7)(8)の例外にみえるケースの大部分はこの同一スペース解釈によるものである。これ以外に関係節の中の時制がアクセス原理によって親スペースから指定されることもあるが、これらすべては日本語の談話構成原理に則った動きである。

ただし、「～シタ 1 年前」のような表現があり、筆者の現在の図式では説明できない。

(38) a. 君が見た一年も前に、私はその映画をアメリカで見た。 橋本 (1997:50)

b. 大金をかけて新しい製品を開発しても、完成した 1 年も前に他社がもっとすごい製品を売り出しているかもしれない。

このタ形・タ形は同じスペースとは考えられないにもかかわらず、**P>Q** であり、かつ **P** は絶対テンスでもない。このケースについてはまた稿を改めて論じてみたい。

参考文献

- Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.
- 橋本修 (1996) 「引用節の基準時」『文藝言語研究 言語篇 (筑波大学文藝・言語学系)』29, 25-39.
- 橋本修 (1997) 「マエ・アト節のトキ解釈」『文藝言語研究 言語篇 (筑波大学文藝・言語学系)』32.
- 井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版.
- 丹羽哲也 (1997) 「連体節のテンスについて」『人文研究 (大阪市立大学文学部)』49-5, 29-64.
- 丹羽哲也 (2013) 「連体修飾節における基本形とタ形の対立」『形式語研究論集』和泉書院, 263-283.